



I. 全体構成

去る3月9日に新しい高等学校学習指導要領が告示となった。2013年（平成25年）4月からの実施となる。そして、その中の「外国語科（実質的には英語科）」の構成と内容は、現行のものと大きく異なることとなった。1995年（平成6年）にそれまでのⅡ a、Ⅱ b、Ⅱ cといった科目（厳密には種目）が「オーラル・コミュニケーションA、B、C」や「リーディング」「ライティング」といった科目に再編されたとき以来の大改訂かもしれない。

新しい科目については、次項以降で詳述するが、ここではおおまかに英語科（正確には外国語科）の改訂の特徴を見ておく。

1. 改訂のポイント

新学習指導要領における主な改訂のポイントは、以下の通りである。

- 必履修科目：現行の選択必履修から「コミュニケーション英語Ⅰ」の共通必履修に変更
- 科目構成：科目構成を変更し、4技能の統合的かつ総合的な育成を図るコミュニケーション科目、論理的に表現する能力の向上を図る表現科目、会話する能力の向上を図る「英語会話」に再編
- 主な改善事項

指導する語数を充実。コミュニケーション英語Ⅰ、Ⅱ及びⅢを履修する場合においては、高等学校で1,800語、中高校で3,000語を指導

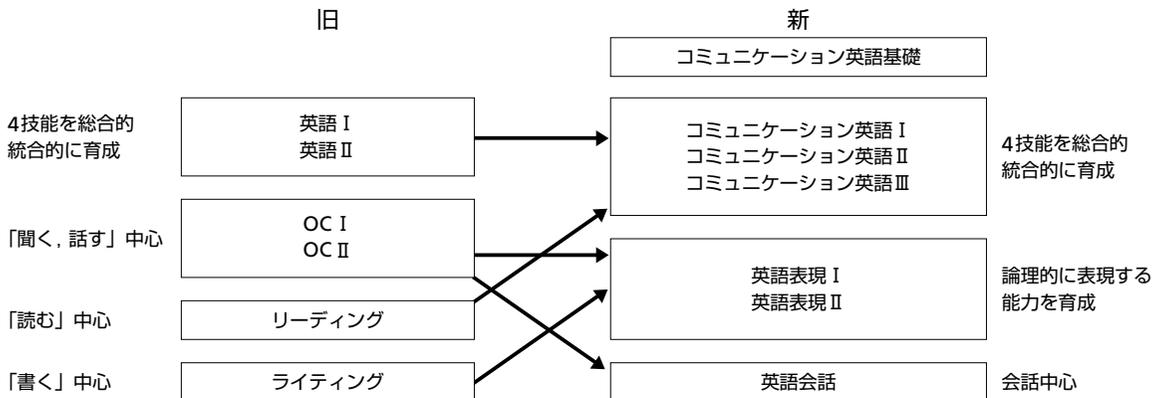
（現行、英語Ⅰ、英語Ⅱ及びリーディングを履修した場合、高校で1,300語、中高校で2,200語）

生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とすることを明記

（文部科学省ウェブサイトより）

2. 科目構成の変更

文部科学省によれば、新旧学習指導要領の科目構成は、下図のように変わるとされている。



なお、矢印は、指導内容の変更に係わる概略イメージ（文部科学省ウェブサイトより）

3. 新科目の導入

新しい科目構成でまず目を引くのは、「英語表現Ⅰ、Ⅱ」の新設である。今までは「話すこと」（オーラル）と「書くこと」（ライティング）という重点ごとに2つの科目に分けられていたものが、「表現」の名の下に統合されたものである。

もうひとつの大きな変更が、「コミュニケーション英語Ⅰ～Ⅲ」の新設である。従来の英語Ⅰ、Ⅱと同様に4技能を扱うとされているが、このように3学年を通した科目が設定されるのは、3年間かけて履修する「英語A」「英語B」が設定されていた1973年施行の学習指導要領（1983年に終息）以来のことで、ほぼ四半世紀ぶりとなる。

この他、中学校の復習のみを目的とした「コミュニケーション英語基礎」、海外生活を想定した実用的な会話を扱う「英語会話」が新設された。特に前者は、既習の内容を繰り返し学習することを可能とした新しい学習指導要領ならではの科目となっている。

4. 想定履修パターン

「総則」によれば、卒業までに履修すべき単位は74単位以上とされ、従来と同じである。他の教科の科目編成が大幅に変わらないことを考えれば、英語科でとれる単位数も従来とほぼ変わらないと考えられ、その範囲内での履修となる。現時点で想定される履修のパターンとしては、次のようなものが考えられる。なお、必修は「コミュニケーション英語Ⅰ」の3単位（2単位まで減可）のみとなっている。

現時点で想定される履修パターン

(1) パターンA

()内は単位数

1年次	コミュニケーション英語Ⅰ (3)	英語表現Ⅰ (2)	計5単位
2年次	コミュニケーション英語Ⅱ (4)	英語表現Ⅱ (2)	計6単位
3年次	コミュニケーション英語Ⅲ (4)	英語表現Ⅱ (2)	計6単位

計17単位

(2) パターンB

1年次	コミュニケーション英語Ⅰ (3)	英語表現Ⅰ (2)	計5単位
2年次	コミュニケーション英語Ⅱ (4)	英語会話 (2)	計6単位
3年次	コミュニケーション英語Ⅲ (4)		計4単位

計15単位

(3) パターンC

1年次	コミュニケーション英語Ⅰ (3)	英語表現Ⅰ (2)	計5単位
2年次	コミュニケーション英語Ⅱ (4)		計4単位
3年次	コミュニケーション英語Ⅲ (4)		計4単位

計13単位

(4) パターンD

1年次	コミュニケーション英語Ⅰ (3)		計3単位
2年次	コミュニケーション英語Ⅱ (2)	(英語会話 (2))	計2 (4) 単位
3年次	コミュニケーション英語Ⅱ (2)		計2単位

計7 (9) 単位

(5) パターンE

1年次	コミュニケーション英語基礎 (2)	コミュニケーション英語Ⅰ (2)	計4単位
2年次	コミュニケーション英語Ⅱ (2)	(英語会話 (2))	計2 (4) 単位
3年次	コミュニケーション英語Ⅱ (2)		計4単位

計6 (8) 単位

(1) パターンA

「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」と「英語表現Ⅰ・Ⅱ」を履修する。「英語表現Ⅱ」は、現在多くの学校で「ライティング」について行われているように、2単位ずつ2年に分けて履修されることが予想される。

(2) パターンB

パターンBの考え方としては、「英語表現Ⅱ」の難易度が高くなった場合、「英語表現」はⅠのみを1年次に履修し、2年次は「英語会話」、3年次は「コミュニケーション英語」のみにする、というものである。3年次は、「学校設定科目」で英語を履修する学校もあるかもしれない。

(3) パターンC

「コミュニケーション英語Ⅰ～Ⅲ」と「英語表現Ⅰ」のみを履修する。「英語表現Ⅰ」の代わりに、「英語会話」をいずれかの学年で履修することも考えられるであろう。

(4) パターンD

「コミュニケーション英語」はⅠ、Ⅱのみ、そしてⅡを2年間かけて履修する。「英語会話」をどこかの年次で履修することもあるだろう（選択科目となるかもしれない）。

(5) パターンE

「コミュニケーション英語Ⅰ」は、「コミュニケーション英語基礎」のあとに履修することとされている。必修科目である「コミュニケーション英語Ⅰ」を1年次で全く履修しないわけにはいかない場合、「コミュニケーション英語Ⅰ」を2単位に減じ、1年次で両方履修するのがこのパターンである。2年次、3年次では、単位数に応じて「コミュニケーション英語Ⅱ」や「英語会話」を履修することになるのではないか。

5. 英語での授業

今回の学習指導要領改訂では、中学、高校とも、学ぶべき語数が増やされたことが話題となった。上記「1. 改訂のポイント」、そしてこの項目を扱った別項を参照されたい。

授業を原則として英語で行う、という項目も話題になった。これは、「第3款 英語に関する各科目に共通する内容等」の4番目に置かれた、以下の指示である。

- 4 英語に関する各科目については、その特質にかんがみ、生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする。その際、生徒の理解の程度に応じた英語を用いるよう十分配慮するものとする。

生徒の理解の程度への配慮は確かに必要で、何年生では何をどこまで英語で教えるのか、という問題に関しては、しばらく試行錯誤の時期が続くかもしれない。